

Accounting, Arithmetic & Art Journal



The **P**ACIOLI **S**OCIETY **J**APAN

1994. 03

第四回フォーラム開催のお知らせ

平成6年3月5日(土)午後2時から日本大会館(市ヶ谷駅下車)にて、久野秀男先生(学習院大学)をお迎えして「パチョーリ以後:『簿記』とは何だったか」のご講演をいただきます。先生が長年探求し続けてきたテーマですので、興味の尽きないところです。ひき続き別室で開催する懇親会にも奮ってご参加ください。

1494~1994:Quincentennial Celebration

1994年4月9日から12日にかけてイタリア・ヴェニスにてイタリア会計史家協会(SOCIETA DI STORIA DELLA RAGIONERIA)らの主催による『ルカ・パチョーリ記念特別世界会議(CONVEGNO INTERNAZIONALE STRAORDINARIO PER CELEBRARE FRA'LUCA PACIOLI)』が開催されます。

大会プログラムによると4月9日(土)午後2時より登録を開始、同日は代表者会議とカクテル・パーティーがあり、翌日(日)は教会での古典音楽のコンサートを楽しみ、4月11日(月)午前の統一会場、午後は分科会に別れての研究報告が続き、12日(火)午前の分科会を終えて、正午に閉会する。なお、オープション・ツアーとして、12日の午後ヴェニスを立ち、ルカ・パチョーリ生誕の地・サンセポルクロ町を訪問する一泊の巡礼ツアーが用意されています。

大会事務局

Venezia Congressi s.n.c

Dorsoduro 1056-30123 Venezia

tel.041/5228400-fax041/5238995

上記の国際会議開催に合わせて、日本会計史学会では4月4日に成田を立ち、ローマ、アッシジ、サンセポルクロ、フィレンツェを経てヴェニスに滞在(4/9~12)し、その後ペローナ、ミラノを経由して4月15日成田に帰国するツアーを計画しています。

詳細:日本通運(株)大阪旅行支店 Tel06-231-0303 (「世界会計史学会」係)

会計史学会を追いかけるようにして大原簿記学校も、4月22日に成田を立ち、5月5日に帰国するイタリア・ツアーの計画があります。

詳細:大原簿記学校本館 Tel03-3237-8711(伊藤)

シアトル大学パチョーリ協会

ビデオ・フィルム『ルネサンスの影の英雄:ルカ・パチョーリ』を世に送り出すなど精力的に活動しているシアトル大学のパチョーリ協会は本年6月にサンセポルクロ町に大理石製のパチョーリ像を建立する運びとなりました。

また、これを記念して当地にてシンポジウムを開催する予定でピルグリムを募っているそうです。

第一回シンポジウム:6月 19 日～23 日

第二回シンポジウム:6月 26 日～30 日

シンポジウムを二回に分けたのは当地の宿泊施設などの関係によるもので、同一内容のものです。

また、以下のデザインによるセーター(\$25)、Tシャツ(\$15)、帽子(\$15)を作り、記念に頒布しています。参考までにご紹介いたしました。



第三回フォーラム大会記

鈴木一道(大東文化大学)

日本パチョーリ協会と第三回フォーラム

本協会は 1991 年8月に会計史、数学史、美術史などパチョーリに関連する分野の研究を目的として、10 名が Seattle University の Pacioli Society に入会したことをもって始まる。その後拓殖大学商学部三代川研究室に事務局を置き、1992 年3月に拓殖大学茗荷谷校舎における茂木虎雄教授(当時立教大学、現在大東文化大学)の『わが国におけるパチョーリ研究の歴史』をもつて第一回フォーラムを開催し、同年 11 月に同大八王子校舎における中西 旭教授(中央大学)の『会計の祖としてのルカ・パチョーリ』をもつて第二回を開催した。

第三回フォーラムは 1993 年6月 12 日午後2時から、茂木虎雄教授を準備委員長として、大東文化大学板橋校舎において開催された。研究報告は江村 稔教授(亜細亜大学)による“*No Royal Road*”であり、特別参加者を含め約 40 名が参加し、盛況であった。また報告会場には司会者である片岡泰彦教授(大東文化大学)が持参したナポリのカプティモンテ美術館のパチョーリの絵の複製写真が飾られ、出席者の関心をひいた。

江村 稔教授の研究報告要旨

報告はわが国会計学の発展に強い影響を与えた江村会計学のエッセンスの開陳であり、また *No Royal Road* (苦難の道)を歩まれた教授の研究軌跡の披瀝でもあった。これは簿記の二重性を柱に資本会計を対象としてわが国会計学の現状に警鐘を鳴らす部分からなっていた。

教授は『複式簿記生成発達史』出版当時の興味深いエピソードから報告を始め、次いで、その付録にあるパチョーリの記帳範例の「現金は…与えるであろう、持つであろう」という表現の分析から、この時代には借方、貸方という2つのエレメントではなく、商品と企業、企業と甲(人名)という4つのエレメントがあり、仕訳の間の二本斜線は省略された「企業」を意味するとし、リトルトンに即して勘定記入法を論じた後、彼の3種の *duality* のうち、記入の二重性をとりあげ、複式簿記が対象にする経済活動が二面性を有しているので、記録も二面的でなければならないとする自説を紹介した。そして、簿記を技術的範疇たる複式簿

記と経済的範疇たる複式簿記とに分けると、資本主の代理人に対する簿記の強制、すなわち責任のチャージ、デイスチャージを明らかにするための代理人簿記が多分古代ローマにあった筈だと想定できると言う。

次に、以上の論述をふまえて代理人会計説に立脚して持分会計を展開した。まず、凍結されたものとしての利益準備金を、一時的に株主の持分を離れて会社に帰属する処分済利益に入れたことに疑問を呈した。また昭和 49 年の企業会計原則の修正で、資本金の区分には法定資本を記載することになったが、これは企業会計原則が商法にドッキングした敗北の印であるとし、額面主義の立場からこれを批判した。すなわち法定資本を会計学が規定することもなく、払込金額総額ではなくその2分の1を資本金組入れの基準にするのは会計理論上根拠がなかった。さらに昭和 38 年の計算書類規則で損益計算書に任意積立金の取崩額を記載したことを批判し、さらに損益計算書が配当可能利益を示すことの妥当でない見地から、それに当期末処分利益を表示したために生ずる教育現場での困惑を想像して、利益処分をはずした期間損益計算書に戻すことが必要であると述べた。そして「株主持分変動表」の作成、利益処分案の廃止、繰越利益の変動は別表ないし注記によって示すことを提言した。

さらに、種々雑多な特別損益が入って、これをもって「純」利益とする表現になじめないのが、当期利益に統一すべきであるとも言った。

最後に、昭和 56, 57 年以降の商法と企業会計原則の調和の中で論争はなくなり、日本の会計の研究は停滞期に入り、学問の発展はなくなったとし、昭和 24 年の論争の時代をもう一度振り返り、新しい歴史を切り開くことが必要であると述べた。

なお、吉澤英一助教授(浦和短期大学)と中西 旭教授から、質問および意見の陳述があった。(雑誌『企業会計』に一部転載済み)



The **IP**ACIOLI **S**OCIETY **U**JAPAN

日本パチョーリ協会 〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14 拓殖大学 商学部 三代川 研究室 TEL.03-3955-8783
The Institute for Management and Accounting / Takushoku Univ. Miyokawa Office